

「赤彦忌」作詞の校歌力強く 秋田・角館高校同窓生も合唱

03月28日（水）

諏訪郡下諏訪町ゆかりのアララギ派歌人島木赤彦（1876～1926年）をしのぶ「第25回赤彦忌」が命日の27日、同町西高木の町立諏訪湖博物館・赤彦記念館で開かれ、赤彦が校歌を作詞した秋田県立角館（かくのだて）高校（仙北市）の同窓生たちが初めて参加した。赤彦の歌を歌い継いでいる下諏訪町の女性コーラス「赤彦童謡を歌う会」の会員らと共に、情感を込めて校歌を歌った。



赤彦が作詞した校歌を歌う角館高校の同窓生たち

同館などによると、最晩年の赤彦は、秋田出身で同派歌人の画家から、当時旧制中学だった同校校歌の作詞依頼を受けた。亡くなる前年、病を押して角館を訪れ、風景を歌詞に盛り込んだという。赤彦が1、2番を書き、没後に同派歌人の斎藤茂吉らが3、4番を補完して、1926（大正15）年の校舎落成式で歌われた。

東京在住の同校同窓生でつくる「東京若杉会」会長の橋本清さん（73）＝東京都世田谷区＝が、昨年の赤彦忌で校歌が初めて歌われたことを信濃毎日新聞の記事で知り、仲間に参加を呼び掛けた。この日は東京と秋田に住む60～70代の26人が訪れた。

橋本さんは「故郷の自然を描写した歌詞は遠くに住むわれわれにも懐かしく、常に誇りとして、心の糧として歌ってきた」とあいさつ。昨年の赤彦忌で校歌を初めて披露した歌う会の19人らと、「田沢の湖（うみ）」「鰍瀬（かじかぜ）川」などの地名が詠まれた歌を4番まで力強く歌い上げた。